

仕掛け人インタビュー vol.3

人が人らしく 生きていくために、 農業応援団を育成する 「教育ファーム」を。

前編

コミュニティ クリエイター

小森 一秀



～目次～

- 中学の時、日本なのに全く言葉が通じない田舎へ。その農村風景が残ればいいなあと。
- 「仕事で山に登れる会社」ってすごいいいなあ！って思ったんです。
- 僕にとって愛知万博は「もうあれ以上の仕事は二度とない」と思える存在です。
- 「モクモク」は、お客としていっても面白い。働いているスタッフも楽しそうだったんです。
- リーマンショックで光があたった農業。まだ、六次産業化という言葉もなかった
- 農業の問題は、作り手側に「価格決定権がない」こと。

中学の時、日本なのに全く言葉が通じない田舎へ その農村風景が残ればいいなあと。

初めて農業を意識したのは、中学生のころでした。友達一家に誘われて、山形旅行へ。そこは農村地帯で棚田がとても綺麗な町。ペンションに泊まり、清流で釣りをして過ごしました。その時、地元のお婆ちゃんが話しかけてくれたんです。だけど何を言ってるのか、さっぱり分かりませんでした（笑）。同じ日本なのに。その光景が不思議に今も胸に残っています。あの風景は残したいなあと。

「仕事で山に登れる会社」ってすごいいいなあ！って思ったんです。

大学を出て最初に就職したのは、東京の環境コンサルタント会社の株式会社プレック研究所でした。そこで松崎や倉方と出会うのですが、その話は後ほど。就職した理由は、実は働きたくなかったから（笑）。大学時代は山登りに熱中して、勉強はさっぱり。「卒業したら俺は山小屋で働くぞ」なんて思っていたんです。



そんな中、大学4年生の時に、環境関連の法律を学ぶ講義がありました。山が好きで自然に興味があったので「ちょっと聞いてみるか」くらいの気持ちで授業に参加。講師の先生の自己紹介に衝撃を受けました。「私がいる会社は、山に登って調査したり、自然環境の調査をしたりしています」。それ以外の授業内容は全く覚えていません。とにかく「山に登ってお金をもらえる仕事があるのか！」とビックリ。授業が終わると先生の所に駆け寄り「先生の会社で働かせて下さい」とお願いしました。

「仕事で山に登れる」というだけで、何をする会社かよく知らないまま入社しました。そのころの社会状況は、“公害問題”という言葉がまだ残っていたような時代。“環境問題”というワードが広まる前夜です。そんな時に入社したのが環境コンサルタント会社でした。入社してみると何のことはない営業部署。「仕事を取って来い！」と放り出され、毎日が飲みニケーション。それでも会社は僕の山好きを忘れないでいてくれて、山で調査が必要な時は駆り出されました。「よっしゃ明日はネクタイせんでいい！」と喜んで山をよじ登ってました。スキー場やリゾートホテルを造る前

には必ず環境アセスメント（環境影響評価）の調査をします。それ以外は営業の日々でしたが、営業の仕事もどんどん面白くなりました。

僕にとって愛知万博は 「もうあれ以上の仕事は二度とない」と思える存在です。

僕の転機になったのが、名古屋への転勤。ある日部長に飲み連れて行かれ「明日、名古屋へ行くぞ。事務所をつくるから」。それで転勤というわけです。一人ぼっちの事務所に電話が置かれ、僕の名古屋生活が始まりました。会社が名古屋に進出した理由は、大きな公園の計画ともう一つ、愛知万博の誘致活動のため。誘致が成功した開票速報の当選の瞬間は、今でも名古屋のホテルの会場が熱気に包まれたのを覚えています。1997年の6月のことでした。僕は30歳になる前で、胸が震えて「この仕事をやり切るぞ」と腹を括りました。そして2005年に「自然の叡智」をテーマにした愛知万博が開催され、その翌年まで力を尽くしました。



面白かったなあ。誘致に成功して、地元の反対活動が凄ごかったし、途中で会場変更もあり、環境アセスメントのやり直し。環境アセスメント法の整備と万博準備が同時期で、走りながら法律が作られていく感じ。変化する状況に対応して、無茶も色々したなあ。あれ以上のことはできないし、やり切った感じがあります。そして万博の後処理を終えた 2007 年に退職しました。

「モクモク」は、お客としていっても面白い。

働いているスタッフも楽しそうだったんです。

結婚して子の親になっていた僕が、「これからどうしよう」と考えた時に思い浮かんだのが、『伊賀の里モクモク手づくりファーム』でした。農業のテーマパーク。よく家族でそこに遊びに行っていて、その時のスタッフの対応が素晴らしかったんです。「どうして皆こんなに楽しそうに働いているんだろう。面白い会社だなあ」と興味津々でした。



『モクモク』は当時すっかり人気上昇中で、企業や行政からの視察がすごく増えていました。「『モクモク』に事業のアドバイスをして欲しい」という仕事が舞い込み始め、コンサルティング子会社を作ったばかりのころ。そこに僕がコンサル出身として入社を志望したのです。「コンサル出身が来たぞ！こりゃあいい」ということで採用。自分でも良いタイミングだったと思います。

『モクモク』への転職を機に名古屋から滋賀県甲賀市へ移住しました。すっかり気に入って、今でも住んでいます。2017 年まで『モクモク』で働き、現在に至ります。

リーマンショックで光が当たった農業 まだ、六次産業化という言葉もなかった。

2008 年はリーマンショックが起こり、企業の雇用体制が揺らぎ、農業に脚光が急に当たりました。

「これからは農林水産業を活性化させ、6 次産業化で成功しよう」というムードが高まり、色んな TV 番組が『モクモク』へ取材に来てくれました。そして『モクモク』で働きたい就職希望者が何千人にも急激に膨らみ、スタッフ皆で驚きました。

『モクモク』時代に一番お世話になったのが、社長の木村修さんと専務の吉田修さんの 2 人です。入社面接では吉田専務にお世話になりました。入社決定後に家族でご挨拶に行った時、迎えてくれたのは木村社長。娘のために採れたてブルーベリーを持って現れ、娘を感激させてくれました。木村社長は人を喜ばせることに秀でていて、“人をその気にさせるプロ”。スタッフ皆も社長が大好きな様子でした。「この人のためなら仕方ないねえ」と思わせてしまう才覚の持ち主。一方、吉田専務は厳しい方。“仏の木村&鬼の吉田” ペアでビジネスしていて、とてもバランスが取れているなあと思いました。

農業の問題は、作り手側に「価格決定権がない」こと。

木村社長と吉田専務は 2 人でよく「事業と運動」という話をされていました。事業とはビジネス、運動とは社会に対する働きかけのこと。ビジネスと社会性を両立して、『モクモク』のファンを増やそうと。そしていずれはもっと広く「農産物の価格決定権を農家側に取り戻そう」とされていました。



農業の構造的な問題はここに 있습니다。作り手側に価格決定権がない。農産物を作るためにかかる経費……仕入原価、人件費、一般管理費、利益 etc. いくらかろうが、そんなことはお構いなし。相場で売値が決まります。これでは農業はビジネスにならない。

目を外に移してみると、スポーツやアイドルのファンは、チケットを買い叩くようなことはしません。人となりを知り、日々の奮闘を知り、応援のためにチケットを買ってくれる。農業ビジネスもそうあるべきだ。……というのが2人の考え方。実際『モクモク』には、熱く応援してくれるファン会員がたくさんいました。

人が人らしく 生きていくために、 農業応援団を育成する 「教育ファーム」を。

後編

コミュニティ クリエイター

小森 一秀



～目次～

- 僕の仕事は、交流デザイン部門。今は「指定管理者」として公共施設の運営をしています。
- クリエイターとは、ちょっと先の未来がイメージできる人。
- TONZAKO デザインに今足りないのは、価格決定権と TONZAKO デザインのファン。
- 韓国や中国も課題が地域活性化なんですよ。今、それぞれの国の企業さんのコンサル中です。
- 新型コロナウイルスの影響で、海外からの野菜が入って来なくなるかも。
- 死ぬまでにやりたいこと？日本に教育ファームを増やして、そこを行脚することかな～。

僕の仕事は、交流デザイン部門。

今は「指定管理者」として公共施設の運営をしています。

現在は2つの施設の指定管理の中の一部を担っています。一つは、2019年4月1日にオープンした『歴史の里志段味古墳群』があります。この施設は、名古屋市教育委員会が整備を行い、中電興業株式会社、岩間造園株式会社、ニワ里ネットそして弊社の4者が共同で指定管理者として運営にあたっています。

古墳を保存しながら作った公園で、古墳時代を感じる体験プログラムを多彩に開催しています。そこに農業を体験する畑もあります。今後の企画をたくさん考えてワクワクしていたのに、新型コロナウイルスの影響でイベントは軒並み開催中止に。せっかくの企画をどうしようか。アレンジして動きたい。今は現場に入り、即断即決で汗をかいています。じっとしてても仕方ないですからね。

「やりたい！」って気持ちを周りに話しているうちに、「じゃあやれる方向を考えよう」と現場のムードが変わってきました。



もう一つは、2019年11月にスタートした、春日井市農業ふれあい公園の『あい農パーク春日井』です。春日井市の事業で、株式会社トヨタエンタプライズ、岩間造園株式会社、そして弊社 TONZAKO デザインの3社が共同で指定管理者として運営にあたっています。

僕はアドバイザー的な役割と今は実際に運営する役割にもあたっています。

その農場の広さは3ヘクタール。野球場1個分ぐらいを想像してみてください。そこで、季節の野菜を作っています。1年目なので、僕も現場に入って、がっつり作物を作っていますよ（笑。真っ黒でしょ？新型コロナウイルスで、室内イベントは軒並み中止ですが、農作物はすくすく成長しますからね。

クリエイターとは、ちょっと先の未来がイメージできる人。

僕が考えるクリエイターとは、「ちょっと先の未来」をイメージできる人。「今いるこの場所がどう変われば嬉しいかな、どんなサービスを受けられたら嬉しいかな」その答えを具体的にイメージできて、どんな手を打てば良いか分かっている人です。ちょっと先の未来というのが僕なりのポイントかな。5年、10年後といった遠い未来ではなく、“次の夏休みどうしよう”くらいがちょうど良い。僕も受け取り側もリアリティを持って発想できます。

これまで仕事で色んな企画を考えてきましたが、企画だけじゃ面白くなくて、実際に動いてみるのが好き。企画から実行までの時間が短ければ短いほど、熱い気持ちで取り組みます。「鉄は熱いうちに打て」ですね。あとはね、短期のプランの方が失敗しても許されます。何年もかかった末に失敗してしまうと、えらいことになっちゃう（笑）。



愛知万博の仕事では「もう無理でしょ」というタイミングで計画変更がありました。もう四の五の言わずにやるしかなく、火事場の馬鹿力でどうにか乗り越えました。やればできるものだ、とい

うのがその時の教訓。どんな事でも予算・人員・時間に限りがあります。理想を掲げながらも折り合う地点を見出し、多少強引でも着地させる。そのために締切はとても大切ですね。

僕は結果をすぐ見たいタイプなのかも。まずやってみて、お客様の反応を見て、変えていく。僕にかかわるスタッフは大変で、皆振り回されています。「また小森が変なことを言ってるよ」ってムードになっても、僕が率先して楽しく動いちゃうので、「仕方ないなあ」って感じで皆は付き合ってくれているのかな。

TONZAKO デザインに今足りないのは、 価格決定権と TONZAKO デザインのファン。

松崎とは前々職からの付き合いです。同じ会社の名古屋の事務所で5年ほど一緒に働きました。モクモク時代にはコンサルとしての仕事で設計図が必要になると松崎に依頼していました。その後個人事業を始めつつ TONZAKO デザインに居候させてもらっていたところに、松崎に意見を求められ企画をいくつか出したんです。「コンペに参加したいから」と言われ……。その企画が名古屋市と春日井市の指定管理の仕事ですね。「じゃあ腰を据えて働かないと」と、松崎の会社に入りました。

4人のチームになって変わったことは、僕自身の仕事は実はあまり変わってません。新たに「3人が僕のこと“うるさい！”って思ってるんじゃないかな」という心配が加わりました（笑）。

何より、この会社を成功させたい。カモネットワークも既に持っている松崎・山田に、もう一回り大きく成長して欲しい。上から目線で心苦しいんだけど、でも言っちゃいます。あらゆることを指摘しちゃいます。

TONZAKO デザインを俯瞰して見ると、可能性をすごく感じます。僕もこの会社にとっぷり浸かって働くつもり。だから皆には会社の社会性をもう少し意識して欲しい。松崎、山田は「TONZAKO デザ

インは4人の会社」って思っているけど、僕は代表取締役ではありません。権限が違う。立場が違う。それで一度、彼らを怒鳴りつけちゃいました「俺たち4人は横並びじゃねえぞ。代表取締役と平社員だぞ（違いますが…）」と。彼らなりに僕に気を遣ってくれているんでしょうけどね。ちょっと見た目年齢が上なんで（笑）。

社内・社外の人達は、皆冷静に見てると思いますよ。「TONZAKO デザインはこれからどうなっていくんだろう」と。TONZAKO デザインに今足りないのは、価格決定権と TONZAKO デザインのファン。ファン獲得のために努力する必要があります。B to B の会社のファン獲得とは、付き合うあらゆる人へのサービス。関わった担当者さんがいずれどの部署に移っても、TONZAKO デザインのことを頭の片隅に置いてもらえるように。在任中に良い関係を築き上げられるよう、最大限のサービスが必要です。

韓国や中国も課題が地域活性化なんですよ。

今、それぞれの国の企業さんのコンサル中です。



モクモクファームを退職した後にお声がけいただいて、個人事業で、いろいろな農業の6次化事業に関わらせていただいています。一部は下記です。韓国や中国では、文化も違うし言葉も違いますが、基本的なことは同じかなという感じですね。もちろん違うと思う所もあります。例えば有機農産物を例に取れば、韓国は農産物を育てる基準が厳密に決まっているので基準で選びますね。日本では、遠くで作っているオーガニック野菜より、近くの農家さんの野菜を選んで買うイメージですね。中国は少し前の状況ですが、認証制度もいっぱいあるけれど、それがあまり信用されていない感じでした。

1) 株式会社戸倉トラクターのアドバイザー

愛知県愛西市の若い農家さんです。「パソナ農援隊」さんから紹介を受けて始めました。先日セントレアで開催した「空飛ぶ八百屋」も一緒にやりました。



2) カゴメ野菜生活ファームのアドバイザー

不定期で入らせていただいています。長野県に2019年の4月にオープンした農業体験施設です。工場の横に集客施設を作ったんです。プラン作りからお手伝いしていました。

3) 農林水産省6次産業化プランナー

こちらは、いろんなところから呼ばれていく感じですね。

4) 韓国の乳業会社「メイル乳業（毎日乳業）」アドバイザー

乳製品だけではなく、最近はいろんな食品を作ったり、カフェのチェーンも展開しています。アドバイザーをしている農業公園ではこの夏はプールまで作ってしまいました。

5) 中国桐郷市「華騰猪舎里庄園」アドバイザー(嘉兴华騰牧业有限公司)

こちらは養豚会社さんで、「もっと地域に役に立ちたい！」と養豚場と観光施設をセットにして運営しています。

新型コロナウイルスの影響で、 海外からの野菜が入って来なくなるかも。

農業も新型コロナウイルスで、外食産業や観光産業が大きな打撃を受けたことから農産物の需給バランスが崩れ様々な影響が出ました。やはり、これからますます大事にしないといけないのが、地域産業としての農業です。そのためには農業をやる人が必要です。それもきちんと食べていける農業にすること。スマート農業も必須ですね。その力添えするのが、これからの僕の仕事かなって思っています。



まずは、消費者側の意識を変えたい。消費者教育、食育とも言われますね。

僕の提案はこうです。世のお母さん方に農業体験をしてもらい、普段スーパーに並んでいる野菜が
いかにエリート野菜か気づいてもらうのです。どうしてあんなに形が均一で、あんなに虫食いなく
生産することができるのか。スーパーに並ぶ野菜は選り抜かれたエリートで、プロ農家の努力の賜
物。「農作物を見る目を養って」と何度言ってもピンと来ないもの。だから体験が必要です。

TONZAKO デザインが携わっている『あい農パーク春日井』のような“農”とふれ合える公園。この
ような取り組みによって、農業応援団はきっと増えるはずです。

死ぬまでにやりたいこと？

日本に教育ファームを増やして、そこを行脚することかな～。

農業応援団を増やすもう一つの方法は、子どもの教育。子どもの“青田刈り”です。言い方は悪い
が子どもを洗脳しちゃう（笑）。農業を職業として意識しながら育つ子どもは、残念ながら今はい
ません。それを変えるべき。“農業は楽しい仕事、やりたい仕事”というイメージを子どもに植え
付けるのです。

フランス国民は郷土愛が強いことで有名ですね。その根源が教育ファームだと実感しています。

『モクモク』時代、毎年フランスから研修生が来ていたのですが、日本の美味しい料理を出して
も、絶対フランスの料理が美味しいというんです（笑）。

農家の人も、チーズ作りの人もすべて先生なんですよ。美味しいものを毎日食べて「〇〇さんが作
ったチーズは最高だなあ、誇らしい」と。その延長線上に、郷土愛や農家に対する憧れの眼差しが
育つのだと思います。フランスには子どもの頃から地元農家さんに学びに行く授業や、農業を学ぶ
施設“教育ファーム”が根付いているんですよ。

※教育ファームの数は、2013 年に 1,800 以上とされています。

日本では最近になって、新潟市で“教育ファーム”での授業が学校教育に組み込まれました。『アグリパーク』という施設。日本で唯一の試みです。関わらせていただいて、嬉しかったですね。

『アグリパーク』で学ぶのは、国語・算数・理科・社会そして道徳も。外で身体を動かしながらあらゆる教科を学びます。例えば掛け算で作物の実入りを計算してみたり、耕作地の面積を計算してみたり。「なぜ掛け算を勉強しなきゃいけないの？」という疑問の答えを、農業してみると理解できます。「勉強は必要だ、勉強しよう」とか「農業は必要だ、農業しよう」と、子ども自身がその必要性を認識できます。



この教育ファームがどれだけ素晴らしいか、何度語っても“見てない人”にはピンと来ない。「学校が教育ファームに子どもを預ければ、忙しい先生も助かりますよ！」と言っても全然伝わらない（笑）。だけど僕はやるしかない。僕が携わっている『あい農パーク春日井』から教育ファームの

必要性を地道に伝え続けようと思います。いずれは各都道府県に一つの教育ファームができるように！

興味がある行政の方がいたら、気軽に連絡してほしいです！行政にしかできないことがありますから！

取材：川北睦子